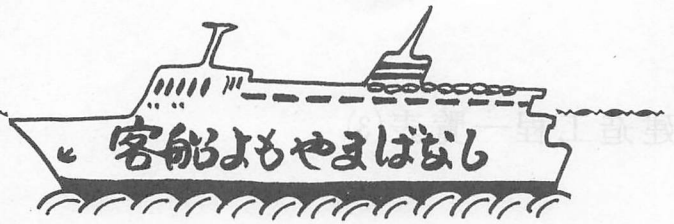


〈連載②〉



クルーズ産業視察団団長記(3)



大阪府立大学船舶工学科講師

池田良穂

マイアミでの港湾局およびクルーズ運航会社の公式訪問を終え、多くの貴重な情報を得た視察団は、いよいよクルーズ客船に乗船し、カリブ海での実際のクルーズを体験することとなった。筆者としては、この乗船体験がこの視察の中でも最も大事なポイントであると考えていた。もちろん、ハード面も重要だが、こちらはある程度お金をかければそこそこのものは出来上がる。しかし、ソフトはそうはいかない。どのようにして、クルーズ客船に乗船してきた人々を楽しませ、満足して下船してもらうかの80%以上はそのソフトによっているといっても過言ではない。その意味で、実際に乗船し、一乗客としてクルーズを体験してみることこそ、今後クルーズ事業に進出したり、またはクルーズ客船の建造に携わる人々には、ぜひとも必要なことと考えられる。そして、世界的にみて本当の意味でのブームを引き起こしているカリブ海のクルーズこそ、その参考になるものと思われる。もちろん、他のあまり成功していないクルーズの例を見学してもそれなりの参考にはなるだろうが、やはり成功例をしっかりと見る方が効率はよいし、本質に迫ることも容易であろう。

我々が乗船した船は、カリブ海クルーズのパイオニアであるノルウェー・クルーズ・

ライン(ノルウェー籍で、元ノルウェー・ジャン・カリビアン・ライン)のシーワード。1988年6月に完工したばかりの新鋭船である。建造は、クルーズ客船の建造にかけては、世界中に名声のあるフィンランドのバルチラ・マリーン社。ただし、建造工場はツルク造船所。このツルク造船所は主に北欧の豪華カーフェリーの建造で知られている。

10月2日、いよいよマイアミ港でシーワードに乗船する。1400人の乗船手続きには、かなりの時間が必要で、夕方6時頃の出港にもかかわらず、昼すぎから手続きが開始され、乗客も続々と集まって来ている。ターミナルの前で、荷物をチェックインする。ターミナルの中が非常に混雑するため、大きな荷物は乗客とは別に船内へ運び込むようになっている。我々11名の乗船手続きは、途中下船の関係もあってか、30分近くかかった。手続きが完了し、いよいよ船に乗り込む。まず、キャビンに入る。かなり高いランクのキャビンであるが、驚くほど狭い。バスタブはなく、シャワーとトイレがついている。キャビンはできるだけ小さくし、その分ラウンジなどの公室設備を充実させることを基本方針とし、それが徹底している感じがする。1週間程度のクルーズでは、その方が合理的なように思う。

キャビンをじっくり検分した後、次に船内の公室を回った。シンプルな廊下と、ガラス張りの階段室が本船の一つの特色である。

ロビーは2層吹きぬけのもので、中央に光るガラスの柱が配置され、それをつたって水が落ち、下のある数個の器で受けるようになっている。その周りには、黒い庭石が配置され、一見東洋的な雰囲気を漂わせている。

レストランは、なかなかモダンな感じのもので、2シイティング制をとっている。配膳室を中央にして2つに分けられているため、700名に食事を一度にだすが、あまり雑然とした感じは受けない。勿論、レストランでの食事の料金はクルーズ代金に入っている。本船は、この2つのレストランの他に、煙突基部に特別レストランを設け、こちらは予約制で、しかも有料である。こうした、要求も最近は出て来ているようだ。

ラウンジはかなり大きなものが2つ、その他にピアノ・ラウンジやワイン・ラウンジ、ディスコなどがいくつかある。メイン・ラウンジは、ショーが観覧できるような配置になっており、ほとんど毎日なにかのショーが上演される。

ショップが非常に大きく、かつ高級品を扱っているのにも驚いた。クルーズ運航会社で「女性客の買い物に対するニーズに答えることがクルーズを運航する上で非常に大事だ」と聞いていたが、それが実感できた。テナントが入り、売り上げの20%程度が船会社に入るそうだが、これも大きな収入源となっているらしい。

もちろん、カジノもある。カジノは、クルーズの夜に花を添える。毎晩結構賑わっていた。筆者も、ルーレットに毎晩通い少しだけ稼がせてもらった。

さて、話をマイアミ出港に戻そう。出港前にポートドリルがあった。キャビンにあるライフジ

ャケットを着て、指定されたボートの位置に集合し、船員の点呼を受ける。熱い日差しの中で長時間整列させられたのですっかり喉が乾いてしまった。このドリルが終わると、プールサイドのバーに行き、ビールで喉を潤す。プールサイドでは、バンドがサンバのリズムを景気よくかなで、十数人の黒人女性が陶酔するように踊っている。時々、周りで見っていた白人が踊りの輪に入り拍手を浴びていた。いよいよ、出港時間になると、音楽がマーチに変わる。もやい綱が外され、船は岸壁を離れ、カリブ海へ向かって走り始める。すぐ近くをモーターボートが並走し、さかんに手を振ってくれている。爆音がして、すぐ脇をバハマ行きの飛行機が飛びあがっていく。

1日目の夕食が6時から始まる。この日の服装はカジュアル。乗船したときのままでよいということだ。着変えようといっても、この時間まではまだトランクは着いていなかったもので、不可能だったのだが。テーブルについた我々は、さっそくシャンパンを抜いて、航海の無事と、楽しいクルーズになることを祈った。

食事の後、メイン・ラウンジでクルーズ・スタッフによるトーク・ショーがあった。クルーズ・スタッフとは、クルーズ・ディレクターに率いられた要員で、船内のあらゆる催し物と、寄港地でのエクスカージョンなどの世話を担当する人々で約15人。アメリカ人を中心として、ヨーロッパ系の人が数人いた。彼らは、朝から晩まで驚くほどよく働く。まさに、乗客を喜ばせることを使命とし、そのプロに徹している感さえある。彼らのボスである本船のクルーズ・ディレクターは元歌手とのことで、歌は勿論おしゃべりも踊りもこなす。このクルーズ・ディレクターを中心に、船内での催し物などのインフォメーションを、ショーにして乗客に聞かせる。さすがに、エンターテイメントの国アメリカである。

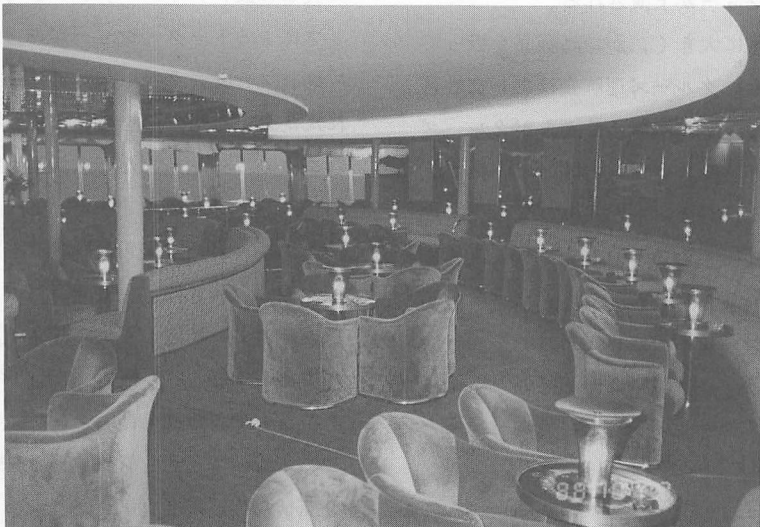
深夜には、レストランでミッドナイト・ビュフェが出される。ちょっとのぞくだけのつもりが、ついつい一品二品とって食べてしまった。そういえば、前述のトーク・ショーで、食事を沢山しようとすれば、本船ではもちろん無料で1日8回できると言っていた。クルーズが終わった時の、体

重がすこし気がかりであった。

船室に帰ると、翌日のニュースが入っていた。クルーズでは、これを十分に読むことが最も重要となる。船内で、また寄港地で行なわれるすべてがこれに書かれており、それを知らなければ船内での楽しみは半減してしまうからである。



シーワード



シーワードのラウンジ